# 上川井だより

令和３年　１月２９日
横浜市立上川井小学校
校長　　山崎　真紀子

## ２月号

## 寛容であること

副校長　佐々木　和美

先日、本校の職員に梅の花がほころび始めたと教えてもらいました。学校から見える梅の木には、確かに小さな紅白の梅の花が僅かですが点々と咲いていました。一年のうちで一番寒い１月下旬ですが、春はもうそこまで来ています。コロナ禍における二度の緊急事態宣言や様々な制約のある学校生活を送ってきた一年間でしたが、子どもたちは落ち着いてよく学び、力をつけてきたと思います。

コロナ禍において、子どもたちは校庭や教室で上手に適度な距離を保って友達と関わることができています。教職員も小規模校の恵まれた環境を十分に活用しています。少人数の学級をさらに半分にするなどして、密にならないような学習活動の工夫を行っています。一人一台のミシン学習、一人一つの実験器具での理科実験、一人一台の iPad でのプログラミング、一人４㎡以上のマスを確保しての全校なわとび等‥。必要な対策を講じ子どもたちに良質な教育を提供しようと試行錯誤しています。

上川井小ならではのよさは他にもあります。上川井小の子どもたちは、１年生から６年生まで同じ学級で過ごすため、クラス替えというわくわくドキドキ感はありませんが、学級の友達が困っているときに助けが必要だとか、今はそっとしておいた方がよいかな、あの子にはこんな言葉がけじゃなくて、こんな言い方の方がいいとか、相手の気持ちを思いやって付き合うことができているように思います。特に１年生から一緒にいる６年生にその傾向が強いように思えます。多くの思い出を共有し共に学んできた子どもたちにとって「あ、うん」の呼吸があるようです。「言わなくても通じる」関係です。また友達の失敗や間違いにも寛容です。いつでもとは言いませんが、強い口調で責めたり、何度も指摘したりということはほとんど見受けられません。学習においても友達の答えが間違っていても合っていても全てが学習という捉えで、友達の話をよく聞いて、正誤だけにこだわらない学習のプロセスを進めています。

「寛容」という言葉を用いましたが、寛容とは、心が寛大で、よく人を受け入れること。過失をとがめたりせず、人を許すこと。自分とは異なる意見、宗教をもっていたり、異なる民族の人々に対して一定の理解を示したり、許容する態度のことです。寛容の反対語は別の言葉ですが、ここで私がお伝えしたい「寛容」の対局にあるのが「偏見」だと思っています。偏見とは客観的根拠に基づかず、先入観や予断によって、個人や特定の集団などに対して非好意的な判断をすることで引き起こされる思考や感情のことです。今、世の中においては、この偏見や不寛容によって、国々や人々がよい関係性が保てない現状が見られることがあります。偏見に囚われることで、結局は互いに心理的、身体的に不安定な状態をつくりだしてしまっているとも言えます。

子どもたちは、長い時間を共に過ごし相手を知っているからこそ、友達を受け入れ寛容でいられるのかもしれません。外部のまだ分からない面を多くもつ人や集団に対しては、不安感が先に立ち、躊躇する場合も今後あるかもしれません。人は新しい環境に飛び込み、新たな人との出会いや活動を通して学んでいきます。変化する社会に対応するために現状維持のままではいられません。その時に必要なことは寛容であることです。いろいろな人と混ざって活動する際には、心理的な負担感が伴うでしょうが、そこには多くのチャンスがあるとみるべきです。

さて、6 年生はあと 33 日学校に来たら卒業式です。2 年生から 5 年生も進級までに 2 カ月足らずとなりました。子どもたちは多くの出来事や友達、保護者の方々や教職員との関わりを通して成長してきました。変化は不安を伴いますが、だからこそ、寛容であることを忘れずに、これからも多くのことを吸収してほしいと思います。寛容であるためには自分の意見をしっかりもつことです。しかしそれを他人に押し付けてはいけません。ただし、寛容でない人々には「寛容であること」を促してよいと思います。